

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	第15回東邦大学医療センター佐倉病院学術集会(東邦医学会分科会)
作成者(著者)	東邦大学医学会編集委員会
公開者	東邦大学医学会
発行日	2023.06.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 70(2). p.70 72.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会抄録(分科会)
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD51840347

第15回東邦大学医療センター佐倉病院学術集会 （東邦医学会分科会）

2022年10月1日（土）

東邦大学医療センター佐倉病院7階講堂

開会の辞 副院長 蛭田啓之
 病院長挨拶 病院長 吉田友英
 学長挨拶 東邦大学 学長 高松 研
 医学部長挨拶 東邦大学 医学部長 盛田俊介

2. 明らかな予防・治療のない疾患における発症前診断の遺伝カウンセリング

○荒川航太
 （臨床遺伝診療センター，臨床検査診断センター）

榊原隆次（内科）

澤井 撰（臨床遺伝診療センター，内科）

竹下直樹（臨床遺伝診療センター）

セッション1

座長 蛭田啓之/増田雅行

1. 新生児への輸血～血液製剤分割製剤作成と運用～

○石田智子，蓮沼秀和，岩下洋一
 町田 保，清水直美（輸血部）

はじめに：新生児輸血は，輸血量が少なく残余血液は廃棄となる。低出生体重児では頻回輸血となる事が多く，ドナー数の削減，血液製剤の有効利用の点で分割使用が望ましい。今回，低出生体重児への分割製剤の運用を開始したので紹介する。対象：1単位製剤，6時間以内に輸血を終了できない症例で，血液製剤は赤血球液（RBC），新鮮凍結血漿（FFP）とした。方法：輸血部で血液製剤を無菌的に分割し，NICU限定の運用とした。結果：以前は血液製剤を病棟でシリンジ分割し汚染や取り違いのリスクがあった。その後，輸血部で無菌的2分割を経て4分割まで可能となり，部門システムにも対応した。運用はNICUと協議し輸血部SOPに記載した。考察：分割製剤は，RBCは分割後1週間，FFPは解凍後24時間まで使用可能で，ドナー数削減，有効利用，汚染や取り違い防止につながり輸血リスクが減少した。また持続投与が可能となり交差試験用採血の回数削減にもなり，有用であると考え。

遺伝子診断は家系内の遺伝性疾患発症において極めて重要な情報となる。発症者の遺伝学的な診断が確定する事により，その家系内の罹患者や非罹患者に対する遺伝子診断のみならず着床前診断および出生前診断が技術的に可能になる場合がある。予防・治療法があるとされる遺伝性腫瘍や遺伝性心血管疾患などに対しては，現在，積極的に家系員に知らせ，遺伝子診断の選択肢を提示することが推奨されている。一方，明らかな予防・治療法のない疾患の発症前診断においては，被験者の自律性を尊重するとともに，十分な遺伝カウンセリングが必要になる。

今回，筋強直性ジストロフィー症例の発症前診断に対する遺伝カウンセリングを経験したので報告する。

3. NICU ポータブル撮影時の放射線防護具の開発

○佐藤 蓮，高木 玲，竹谷 明
 山本彰規，戸澤光行（中央放射線部）

【目的】NICUでのポータブル撮影は乳児の動きを抑えるために看護師の介助が必要となる。その際に看護師とX線管球が近接するため，看護師の中には不安を感じている人もいた。その不安を取るために，新しい防護具を作成し，その有用性について検証した。【方法】移動型X線装置のコリメータカバー部にマジックテープで吊り下げる防護具を作成した。測定点を看護師の位置を想定して照射野中心

から外側に 30 cm, 看護師の①腹部②胸部③頭部の高さでそれぞれ左右に各 10 cm ずつの計 9 点とし, 防護効果を測定した。【結果】頭部の高さの測定点では, 80.6%と高い防護効果が得られた。また, 胸部, 腹部の高さの測定点においても, 防護効果が認められた。【考察】近年, 水晶体の線量限度が厳しくなったことから, 水晶体の被ばくを低減することが求められる。そのため, 今回作成した防護具は有用性が期待できる。

セッション 2

座長 松岡克善/樋口哲也

4. 心臓超音波検査が診断に寄与した原発性 AL 型心アミロイドーシスの一例

○鈴木裕介 (初期研修医室)
清水直美 (糖尿病・内分泌・代謝センター)
岩川幹弘 (内科)

起立時・歩行時の意識消失発作を繰り返していた 80 歳台男性。他院での精査で心不全, 心アミロイドーシス疑いとなり当院に紹介された。患者の忍容性を考慮し, 心筋生検などの侵襲度の高い検査は施行出来ず診断に苦慮する中, 非侵襲的な検査である心臓超音波検査とその特殊解析である Speckle tracking 法が診断の一助となり, 原発性 AL 型心アミロイドーシスの早期診断に至った一例を経験したため, 文献的考察を交えて報告する。

5. 縦隔原発大細胞型 B 細胞性リンパ腫に対して DA-EPOCH-R 療法を施行した一例

○小宮山朋美 (初期研修医室)
清水直美, 田中 翔, 阿部一輝
(糖尿病・内分泌・代謝センター)

縦隔原発大細胞型 B 細胞性リンパ腫 (PMBCL) はびまん性大細胞型 B 細胞性リンパ腫 (DLBCL) の類縁の病型として知られている。症例は 40 歳台男性。性別適合手術後であり, エストロゲン補充療法中であった。約 2 か月前より頸部と顔面の浮腫を自覚され, その後咳嗽, 労作時呼吸苦が出現し前医受診, 右胸水貯留を認め当院紹介となった。縦隔腫瘍と上大静脈症候群が見られ, 経胸壁超音波ガイド下生検で PMBCL の診断。DA-EPOCH-R 療法で治療を行った。PMBCL とその治療, エストロゲンレセプターとの関連について文献を交えて考察する。

6. 重症心不全患者に移植された補助人工心臓が眼循環動態に及ぼす影響の探索

○橋本りゅう也, Randy Kardon, 前野貴俊 (眼科)

近年, 生活習慣病の増加により心不全 (HF) 患者は増加し, 重症化した場合, 心移植に至るまでの間, 著しく低下した心機能を補助する左室人工補助心臓 (LVAD) 移植が生命予後を改善させることが報告されている。また, 全身血行動態不良が眼などの末梢循環に影響を及ぼし, 眼血流低下が視力障害を引き起こすことから全身状態と眼血流の関連を解明することは重要課題であると考えている。今回, 我々は眼血流波形が測定可能なレーザースペックルを用いて, LVAD 移植後の HF 患者群 (19 名) と年齢をマッチさせた健常群 (56 名) の眼血流速度・振幅の比較検討を行った。さらに, 同一患者において LVAD ポンプの回転速度を上げて左室流出路血流速度を 3 段階 (Low, Moderate, Rapid) に設定し, 3 群間における眼血流速度・振幅を比較検討した。結果, HF 患者群の眼血流速度・振幅は健常群と比較し有意に低下していた。また, 左室流出路血流速度の上昇に伴い眼血流振幅は有意に低下したが, 血流速度は 3 群間で有意な変化を認めなかった。

7. 心血管病発症に関する血管平滑筋細胞拘縮仮説

○清水一寛, 高橋真生, 佐藤修司
齊木厚人, 永山大二, 白井厚治 (内科)
原田雅史, 宮崎親男 (脳神経外科)
高原 章 (薬学部薬物治療学研究室)

心血管病発症に関しては, これまで Cholesterol theory, Response to injury hypothesis, Plaque rupture theory of vulnerable plaque などがありましたが, 直接的なプラーク破裂を説明する学説はありませんでした。東邦大学は, Cardio-ankle vascular index (CAVI) の開発に携わり, 日々の診療に使用してきました。日々の臨床のなかで, ストレスなどが誘因となり, CAVI が急に上昇し, その後心筋梗塞や脳出血, 大動脈解離を生じた症例を経験しました。こうした知見より, 動脈硬化巣に豊富に存在する微小血管の血流が動脈の拘縮 (=CAVI の上昇) によって障害を受け, 血管が破綻するのではないかという新しい学説を提唱し, The International Society for Vascular Health (ISVH) の機関誌である Vascular Health and Risk Management 誌に『Rapid Rise of Cardio-Ankle Vascular Index May Be a Trigger of Cerebro-Cardiovascular Events: Proposal of Smooth Muscle Cell Contraction Theory for Plaque Rupture』として報告できました。東邦大学から発信できた新しい学説にてご紹介いたします。

セッション3

座長 岡住慎一/高橋初枝

8. 人工知能 (AI) による食事解析アプリの実用性と栄養相談への活用について検討

○木下幸歩, 鮫田真理子, 川久保さおり
山浦一恵, 金居理恵子, 神戸和泉 (栄養部)
岡住慎一 (外科)

【目的】スマートフォン利用の拡大と健康志向の高まりもあり食事管理アプリが普及している。人工知能 (AI) による画像認識機能付き食事管理アプリが開発され実用している患者も増えている。今回利便性, 正確性について評価し, 栄養相談への活用について検討した。【方法】画像認識機能付きアプリ「カロミル」を利用し, 一般食, 外食, 中食でアプリ値 (全体・単品写真) と実測値の誤差率を比較した。【結果】エネルギー誤差率は一般食 19.5%, 外食 16.5%, 中食 12.5% と中食・外食のほうが誤差率は小さかった。また単品写真のほうが誤差率は小さかったが, 画像の誤認識や分量, 肉, 魚などは部位の把握は出来ず栄養価が大きく異なるケースも見られた。【考察】写真解析は簡便なツールだが誤差も大きく過大・過少評価になる可能性もある。アプリを使いこなせる患者とそうでない患者がおり, 目安量の標準化や個別に検討が必要であると思われる。

9. 摂食嚥下支援チームの活動報告と今後の展望

○山浦一恵 (栄養部)
治田寛之 (リハビリテーション部)
新井沙耶香 (看護部)
佐藤 啓 (薬剤部)
黒崎元良 (耳鼻咽喉科)
長尾考晃 (脳神経外科)
岡住慎一 (外科)

窒息は嚥下時に食道に入るべき食物が誤って喉頭から気道に吸い込まれることで起こる。東京消防庁の報告では令和元年度の窒息誤飲による救急搬送者数は約 1600 人で半

数以上が70歳以上の高齢者である。高齢者における窒息リスクは咀嚼力, 唾液分泌の低下など口腔のリスク要因と, 嚥下反射の遅延, 咳反射の低下など咽頭・喉頭のリスク要因があると言われている。また, 介護老人福祉施設の高齢者を対象にした調査では, 窒息事故の独立した危険因子は, 食事を自立して食べている, 臼歯部に咬合する歯がない, 認知機能が低下していることがあげられている。当院では, 過去5年間で吸引にて食物残渣が引けた窒息死亡事故が, 入院患者に2例起こっている。更なる院内の窒息誤嚥事故防止, 適切な食事提供を目的として2020年7月摂食嚥下支援チームを発足し, 2021年7月よりプレ活動を開始した。これまでの活動と今後の課題について報告する。

10. 急性・重症患者看護専門看護師の特徴と当院における展望

○原田洋平, 照沼 理 (看護部 (HCU))

専門看護師は, 複雑で解決困難な看護問題を持つ個人, 家族及び集団に対して水準の高い看護ケアを効率よく提供し, 保健医療福祉の発展に貢献し併せて看護学の向上をはかることを目的としており, 日本看護協会により「実践」「相談」「調整」「倫理調整」「教育」「研究」の6つの役割が定められている。当院は急性期病院であり, どの患者も重症化するリスクを有しており, すべての患者が急性・重症患者看護専門看護師の対象と認識している。筆者は当院クリティカルケアの経験から急変前対応, 意思・代理意思決定支援の重要性を感じている。当院で初の専門看護師となるため模索しながらではあるが, 専門看護師の特徴と当院における急性・重症患者看護専門看護師の活動の展望を述べる。

総評: 『病院長賞』『医学部長賞』『学長賞』

病院長 吉田友英
東邦大学 医学部長 盛田俊介
東邦大学 学長 高松 研

閉会の辞

院長補佐 松岡克善